

〈音楽〉

視唱力・視奏力を伸ばす読譜指導の工夫 —「読譜マスタードリル」を活用した学習を通して—

沖縄県立南風原高等学校教諭 當 間 錦

I テーマ設定の理由

高等学校学習指導要領において「芸術の幅広い活動を通して、生涯にわたり芸術を愛好する心情を育てるとともに、感性を高め、芸術の諸能力を伸ばし、豊かな情操を養う」ことは、芸術科の目標とされている。その内容として音楽Ⅰでは、歌唱および器楽における「視唱力・視奏力の伸長」が挙げられ、中学校での読譜指導を継続し、更にその能力を伸ばすことが求められている。

これまで私は授業の中で、生徒のミニコンサート、芸術科発表会で、実践的に演奏力や表現力を高める指導を行ってきた。これらの活動を通じた生徒の学習意欲向上は年々目覚しいが、一方で、「演奏したいけど、楽譜が読めないから自分で練習できない。」「音程、リズムが分からない。」といった、視唱力・視奏力が十分に培われていない生徒の読譜指導が課題となっている。

視唱力・視奏力について澤田篤子(2004)は、「生徒が自らの力で楽譜を読み取って音楽を表現したり、既知の音楽の楽譜を理解するなど、『生涯にわたって音楽活動を楽しむための助け』となる」と述べており、音楽の学習内容を深化させ、発展的な音楽活動を展開させるためにも、高等学校における読譜指導は必要である。

授業導入におけるフラッシュカード等の活用、電子リズム伴奏を用いたリズムトレーニングは、読譜指導としても活用されている。これらの方法は一斉指導のため、生徒が楽しみながら学習に参加できる利点はあるが、個々の習得状況や能力の把握は難しく、更に発展・工夫した指導方法が必要となってくる。

そこで今回の研究では、生徒が基礎的なリズム、階名、コードネーム、音楽用語を定着・再確認できる「読譜マスタードリル」を作成し、ゲーム感覚でのリズム認識や階名の早読み・早書きなどの基本編から、簡易なアンサンブル曲や教科書教材曲を用いる応用編を通じた学習活動を展開していきたい。また、基本編での発展学習や応用編での実力チェックを設定し、視唱力・視奏力の定着を実践的に確認できるようにする。

このように「読譜マスタードリル」を作成、活用することは、音楽活動の基礎的な能力を高め、発展的な表現活動に大きく作用するのではないかと考え、本テーマを設定した。

〈研究仮説〉

読譜指導において、音楽活動の基礎的な能力の向上を目的に「読譜マスタードリル」を活用することで、生徒の視唱力・視奏力が伸びるであろう。

II 研究内容

1 視唱力・視奏力の概要

(1) 視唱力・視奏力とは

視唱力とは、「未知の曲を楽器や教師などの助けなしに、階名や音名で読むことによって、そのリズムや高低感を歌いだせる能力」(標準音楽辞典)であり、視奏力は、楽器によって演奏できる能力を意味する。小学校低学年での身体表現やリズム遊び、旋律聴唱などは視唱力・視奏力を培う上で最も大切であり、これら基礎的なリズム感覚と音程感覚、音楽の諸要素理解、ならびに歌唱・器楽演奏の技術とが伴ったときに、初めて視唱や視奏は可能となる。

(2) 視唱力・視奏力の必要性

川邊昭子(2005)は、「音楽の最終目的は音楽を『楽しむ』ことであり、音楽が『わかる』とか音楽が『できる』というのは、その前提となる。音楽活動には、音楽を理解することと演奏することが含まれている以上、『わかる』『できる』を避けて通ることはできない。」と述べている。さらに、視唱力・視奏力は音楽活動における基礎的な能力であり、深化させた音楽が分かり、出来て、楽しむためにも、十分に培われなければならない能力と言える。

このような能力が培われると、生徒が自らの力で自分の好きな音楽を学ぶことも可能となり、生涯にわたって音楽を愛好する心情が育つことが期待される。

2 読譜指導とは

読譜指導の目的は、楽譜を通して音楽を理解するために、やさしく、早く全体の構成を正確に捉える方法、手段を身につけさせることである（新訂標準音楽辞典）。「豊かな変化に富んだ本物の音楽を通して学ばなければならない。」とマーセル(1983-1963)が述べているように、フラッシュカードやリズム練習等の基本的指導だけではなく、さまざまな楽曲を通じた応用的、実践的な読譜指導が必要とされる。

3 読譜マスタートリルの基本構想

(1) 基本構想

読譜マスタートリルは、毎時間の授業導入時において学習を進めて行くことで、年間を通して、視奏力・視唱力を系統的、段階的に習得できるようにする。また、最後まで進んだ後も、次学年で繰り返し学習することによって、さらに楽譜を読める力を定着させることをねらいとする。

(2) プログラム学習について

スキナー(1904-1990)は、理論化したオペラント条件付けの教育的応用として「プログラム学習」を提唱し、ティーチングマシンを開発した。プログラム学習とは、生徒の個人差に応じた学習を目的とする個別学習方式で、スモールステップ、フェーディング、即時確認、積極反応、マイペース、学習者検証についての6つの原理が挙げられている。

個別学習に対応するティーチングマシンは、必ずしも機械ではなくペーパーマシンとしての捉え方もあり、プリントドリルでも系統的な学習は可能である。また、スキナーは「教えるのはティーチングマシンではなく、プログラム（学習内容）である」と述べており、ドリル作成において、生徒がスモールステップで学習できるように、その目標や内容、難易度を系統的段階的に構成することが重要である。

(3) 読譜マスタートリルの目次

読譜マスタートリルの目次は、表1のとおりである。

表1 読譜マスタートリルの目次

【リズム】	【階名】	【和音（コード）】	【音楽記号・用語】
1 絵記号楽譜でのリズム打ち	1 階名の早書き（高音部譜表）	1 英語の音名	1 強弱を表すもの
2 リズム楽譜への書き換え	2 階名のリズム読み（高音部）	2 和音①（メイジャーコード）	2 速度を表すもの
3 リズムの早読み①	3 階名の早書き（低音部譜表）	3 和音②（マイナーコード）	3 奏法を表すもの
4 リズムの早読み②	4 階名のリズム読み（低音部）	4 和音③（セブンスコード）	4 演奏順序を表すもの
5 リズム楽譜で曲名探し①	5 階名よんで曲名探し①	5 和音をみてコード付け	【まとめ】
6 リズム楽譜で曲名探し②	6 階名よんで曲名探し②	6 コードをみて和音付け	1 総合チェック①（視唱）
7 簡易なリズムアンサンブル①	7 簡易な単旋律視唱①	7 コードを弾こう①	2 総合チェック②（視奏）
8 簡易なリズムアンサンブル②	8 簡易な単旋律視唱②	8 コードを弾こう②	

各項目でのNo.7とNo.8は実力チェック、まとめのNo.1とNo.2は総合チェックとなっている。

4 読譜マスタートリルの学習内容について

まず始めに、音楽の三要素（リズム・メロディー・ハーモニー）の中で最も重要な要素の「リズム」を学習する。ビューロー(1830-1894)の「初めにリズムありき」という名言からも分かるように、メロディーやハーモニーのない音楽は存在しても、リズムのない音楽は存在せず、リズムが分かることが読譜学習の根本となると考える。

(1) リズムに関する指導

① 読譜マスタートリルでのリズム指導法

ア 数える方法

拍子を声に出して数え、リズム感を捉える方法。曲の速さを保ったり、アンサンブルにおける拍感の共有という視点からも、有効である。

イ リズム唱

音符の種類に応じて、「ター」「タタ」のような呼称をつけ、リズムを歌い分ける方法(図1)。リズム唱の定着こそ、読譜の初期目標である。

ウ 2拍リズムパターンの練習

2拍単位で組み合わせた音符や休符を、リズム唱やリズム打ちできるようにする。シンコペーション等の2拍リズムパターンに慣れた後、3拍や4拍のリズム読みへと発展させる。

読譜マスタートリル

リズムSTEP3

(氏名) 年 組 番

【学習目標】 拍を感じながら、リズム読みができる。(4/4拍子、3/4拍子)

Try 1

それぞれの音符や休符のリズム読みを覚えよう。

タ

タ

タ

タ

タ

タ

タ

タ

タ

タ

タ

タ

タ

タ

タ

タ

タ

タ

タ

タ

タ

タ

タ

タ

タ

タ

タ

タ

タ

タ

タ

タ

タ

タ

タ

タ

Try 2

次の楽譜に、リズム読みを書いてみよう。

1

2

3

4

1

2

3

4

1

2

3

4

1

2

3

4

4

4

4

4

4

4

1

2

3

1

2

3

1

2

3

1

2

3

3

3

3

3

3

3

図1 読譜マスタートリル リズム編より

② 視奏曲の作成

基本編で2拍ごとのリズムパターンを練習した後、応用編として視奏の実力チェックを行う。曲は、生徒が短時間でリズムを把握し、演奏が可能となるよう、簡易な音符・休符で作曲した。

2声のリズムアンサンブルは、カノン風な「エコー」(図2)、シンコペーションなどのリズムを分散させた「エコーのいたずら」、4声のリズムアンサンブルは、音の高さが違う打楽器で演奏する「バッテリー」(図3)となっている。

図2 譜例①

図3 譜例②

(2) 階名に関する指導

次に「階名」を学習する。多くの生徒は高音部譜表での階名読みを得意としている一方、低音部譜表での階名読みについては不十分な生徒が多い。両譜表ともに階名の理解を定着させることで、次項目(和音)へ発展的に学習を進めることができる。なお、本研究では固定ド唱法を用いた階名読みを行う。

① 読譜マスタードリルでの階名指導法

ア 階名早読み

楽譜をみて、より多くの音を素早く読めるように、単音から小節単位へ広がっていく。

イ 曲名探し

唱歌や童謡、既習曲を探す曲名探しを行い、階名を読むことで既知の音楽を発見できる楽しさを体験する。

② 指五線

五線楽譜での階名定着を目指す方法として、

「指五線」を用いる(図4)。これは、五線の第一線から音を覚える方法で、高音部譜表は「ミソシレファ(みそしる派)」、低音部譜表は「ソシレファラ(そして原)」と固定暗記することから始める。

図4 指五線を用いた学習

(3) 和音(コード)に関する指導

和音の学習では、基本的な長三和音(メジャーコード)、短三和音(マイナーコード)、属七の和音(セブンスコード)を取り扱う。実際に取り扱うコードは、ギターでの基礎的なコードとし、楽譜に表されたコードネームを見て、ギターやキーボード弾きが実践的にできることも目指す。(図5)

図5 コードネームの学習

(4) 音楽記号・用語に関する指導

本研究では楽譜を読む上で重要な4つ(図6)を学習する。生徒の多くは、記号・用語をみて意味を答えることはできるが、その逆は苦手な者が多い。既習曲を利用した練習問題を用いることで、それぞれの音楽記号・用語を楽曲と一致させ、定着を図る。

【強弱に関するもの】	【速さに関するもの】	【奏法に関するもの】	【演奏順序に関するもの】
<i>pp p mp mf f ff</i> dim.	Andante Moderato Allegro Tempo I accel. a tempo rit. ♩ = 96	タイ レガート	D.C. D.S. Fine Coda

図6 楽譜を読む上で重要な音楽記号・用語

5 生徒の実態と分析

(1) 音楽実態調査（事前アンケート）

読譜力自己評価「楽譜を読んで、歌ったり楽器を演奏できるか」（図7）の質問において、約4割の生徒が楽譜を読む自信をもっている一方、約6割の生徒には苦手意識がみられた。

また、「曲を覚えるために必要なもの」の回答項目から、既存の音楽をまず耳で覚え、次に楽譜で歌詞や音程、リズムを確認している実態が、読み取れた。

読譜における苦手項目「楽譜を読む際、何が一番難しいか」（図8）の質問では、多くの生徒が音楽表現をあげており、「音楽用語が難しく、あまり学習していないので覚えられない。」と理由を述べている。これは、実技を中心とした授業が進められるため、音楽用語の学習が不十分だったことが要因として考えられる。

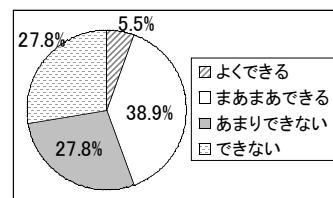


図7 読譜力自己評価

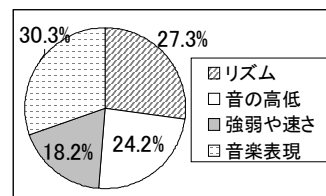


図8 読譜における苦手項目

(2) 読譜能力チェック（事前テスト）の実態

リズム音を聞いて正しい楽譜を選ぶ「リズム判別」は正答率75.2%であるのに対し、リズム音を聞いて楽譜を書く「リズム聴音」と、童謡や唱歌の歌詞に合わせてリズム楽譜を書く「リズム書込み」は正答率がそれぞれ3割前後であった（表2）。

音の高低を聞き取る「音程把握」と、リズムを伴う音の高低を聞き取る「音階聴音」の問題は、それぞれ5割前後の正答率で、音の高さを聞き分ける能力は、リズムに比べて高いことが分かる。

表2 読譜能力チェック結果

問 題	リズム判別	リズム聴音	リズム書込み	音程把握	音階聴音
満 点	3 点	13 点	37 点	18 点	17 点
平均点	2.3 点	4.4 点	10.7 点	10.6 点	7.7 点
正答率	75.2%	33.9%	29.0%	59.0%	45.4%

(3) 分析のまとめ

アンケートと事前テストから総合的に分かることは、生徒は音の高低を聞き分けることはできるが、リズムやその音符、音の長さについては理解が不十分であるということである。そのため、楽譜を書いたり読んだりすることが苦手である。

多くの生徒に必要なことは、まずリズム楽譜が読め、読めるようになったリズムに音階を加えて旋律を認識できるようにする手立てである。よって、読譜マスタートドリルにおいても、系統的段階的な学習を展開することが求められる。

また実際に演奏する場合、速さが保てずリズムが定まらない生徒や、他者と拍感を共有させることが苦手な生徒に対しては、楽譜を読むことと併せて「数えるリズム指導法」を徹底させていきたい。

Ⅲ 指導の実際

1 単元名 リズムアンサンブルに挑戦しよう！ ～読譜マスタートドリルを用いた学習（リズム編）～

2 単元の目標

(1) 簡易なリズムアンサンブル楽譜を読み、音楽記号を理解して演奏することができる。

(2) 2拍単位でのリズムパターンを理解し、複声部によるリズムアンサンブルができる。

3 単元の総時間 リズム編 8時間

4 単元の学習における評価規準

1 関心・意欲・態度	2 音楽的感受の表現・工夫	3 表現の技能	4 鑑賞の能力
①楽譜を見て、基礎的なリズムに関心を示し、主体的に表現しようとしている。	①楽譜を見て、一定の拍感を保ちながら、リズムや休符を感じて、表現を工夫している。	①楽譜を見て、カウントしながらリズム唱やリズム打ちが正確にできる。	①一定の拍感を感じ取り、リズムや休符を聴き取っている。
②曲の特徴、楽譜に示された記号や標語の意味等に関心をもち、意欲的に取り組もうとしている。	②曲の特徴、音楽記号や標語の意味を理解し、演奏表現を工夫している。	②曲の特徴、音楽記号や標語を正しく表現する技能を身につけている。	②曲の特徴、音楽記号や標語の意味を理解し、楽曲における変化を聴き取っている。
③パートの役割を意識し、協力し合って主体的にアンサンブルに参加しようとしている。	③各パートのバランスや全体の調和を感じ取って、表現を工夫している。	③各パートのバランスや全体の調和のとれた表現をする技能が身につけている。	③各パートのバランスや全体の調和によるリズムの動きやよさを味わっている。

5 指導と評価の計画

時間	◆学習内容 ○学習活動 (○の中の数字は活動の順序)	◇指導上の留意点	評価の観点				評価方法
			1	2	3	4	
第一次 4時間 (基本編)	【読譜マスタートドリル リズム STEP 1】 ◆○や◎記号の楽譜で、拍を感じながらリズム打ちをする。 ①記号譜を読み、リズム打ちを練習する。 ②記号譜での二声リズム打ちに挑戦する。	◇楽譜に苦手意識のある生徒も、ゲーム感覚で音を認識できるように導入。 ◇記号譜の○=♪, ◎=♪, ◎=♪を理解させ、数を数えながら打たせる。	①	①			学習活動の観察 マスタートドリル 自己評価
	【読譜マスタートドリル リズム STEP 2】 ◆○や◎記号の楽譜を、リズム楽譜へ移行する。(4/4拍子, 3/4拍子) ①記号譜を音符を使用して書き換える。 ②付点音符の理解、音符の足し算をする。	◇記号譜を音符の書き方に注意して、リズム楽譜へ書き換える。 ◇♪. ♪. ♪. ♪. ♪. の音価を理解させ、簡易な音符の足し算に取り組ませる。	① ②				学習活動の観察 マスタートドリル 自己評価
	【読譜マスタートドリル リズム STEP 3】 ◆拍を感じながら、リズム読み、早読みをする。(4/4拍子, 3/4拍子) ①リズム読みを覚え、早読みを練習する。 ②タイを含むリズム読みに挑戦する。	◇音符の読み方を定着させ、拍を感じてリズム読みや早読みに取り組ませる。 ◇音符の下に読み方を書かせ、スムーズにリズムが読める練習をさせる。		②	①		学習活動の観察 マスタートドリル 自己評価
	【読譜マスタートドリル リズム STEP 4】 ◆タイ、シンコペーションがある楽譜のリズム読み、早読みをする。 ①2拍パターンを用い、リズム譜を作る。 ②タイを含むリズム(早)読みを練習する。 ③二声のリズム打ちに挑戦する。	◇2拍単位のリズムパターン(付点音符、シンコペーション含む)を理解させる。 ◇タイやシンコペーションの読み方に注意して、早読みに取り組ませる。	②		① ②		学習活動の観察 マスタートドリル 自己評価
第二次 2時間 (応用編)	【読譜マスタートドリル リズム STEP 5】 ◆リズム楽譜から知っている曲を探す。(唱歌や童謡) ①簡易なリズム譜から楽曲を探り、歌詞を記入する。 ②簡易な楽曲のリズム穴埋めをする。	◇リズム化された唱歌や童謡の楽譜をみて、既存の楽譜に慣れさせる。 ◇曲名一覧からヒントを得て、リズムを読み、歌詞を記入させる。 ◇歌詞に応じた音価の配置で、音符を記入させる。	②			①	学習活動の観察 マスタートドリル 自己評価
	【読譜マスタートドリル リズム STEP 6】 ◆リズム楽譜から知っている曲を探す。(高等学校で学習する曲) ①音価の細かいリズム譜から楽曲を探り、歌詞を記入する。 ②音価の細かい楽曲のリズム穴埋めをする。	◇リズム化された既習曲の楽譜をみて、既存の楽譜に慣れさせる。 ◇歌詞に応じた音価の配置で、音符を記入させる。				②	学習活動の観察 マスタートドリル 自己評価
	【視奏テスト 練習問題】 ◆「楽譜をよむコツ」を確認し、練習問題に取り組む。 ①3つの手順を理解し、読譜の練習をする。 ②二声のリズムアンサンブルを練習する。	◇視奏テストの実施方法を確認し、次時の学習イメージをつかませる。 ◇3つの手順「2拍ごと」「リズム読み」「リズム打ち」を再確認させる。	③	③			練習問題
第三次 2時間 (確認テスト)	【本時】 【読譜マスタートドリル リズム STEP 7】 ◆簡易なリズムアンサンブルを視奏する。(二声リズム譜の視奏テスト) ①グループでリズム譜の視奏練習。 ②グループ毎に演奏発表テスト。	◇楽譜を読み、グループで二声のリズムアンサンブルを演奏発表させる。 ◇拍数を数える等、メンバーが共通の拍感で演奏できるように工夫させる。	③		③	③	学習活動の観察 演奏発表 鑑賞評価 自己評価
	【読譜マスタートドリル リズム STEP 8】 ◆簡易なリズムアンサンブルを視奏する。(四声リズム譜の視奏テスト) ①グループでリズム譜の視奏練習。 ②グループ毎に演奏発表テスト。	◇楽譜を読み、グループで四声のリズムアンサンブルを演奏発表させる。 ◇決められた練習時間で、視奏練習に取り組ませる。 ◇拍数を数える等、メンバーが共通の拍感で演奏できるように工夫させる。	③		③	③	学習活動の観察 演奏発表 鑑賞評価 自己評価

6 本時の展開 (7/8時間目)

<本時のめあて> 二声のリズム譜が読め、演奏発表することができる。(視奏テスト)

過程	学習活動	指導上の留意点	評価方法
導入	1 リズムトレーニング 	◇フラッシュカードを使ったリズム確認。 ◇パワーポイント教材によるリズム練習。 (大型モニターによる一斉指導)	学習活動の観察
展開	2 本時の流れを確認 ◆練習時間と発表順序を確認する。 ◆本時のめあてを確認する。 3 楽譜を読むコツを確認 ◆例題を一斉演奏する。 4 グループでの練習 ◆グループ内で楽譜を読み、二声のリズム曲を練習する。 5 グループごとの発表 ◆前に出て、リズム視奏発表する。 6 相互評価と自己評価 ◆他グループの発表を聴いての総合評価と自己評価をまとめる。	◇読譜における基本的事項と基礎的な手立て、演奏発表の順序を再確認させる。 ◇3つの手順「2拍ごと」「リズム読み」「リズム打ち」を再確認させる。(前時配布プリント) ◇例題を用いて、一斉に視奏を行う。 ◇視奏問題 (STEP 7) を配布。 ◇問題の特徴を捉え、決められた練習時間で、視奏練習に取り組ませる。 ◇拍数を数える等、メンバーが共通の拍感で演奏できるように工夫させる。 ◇各パートのバランスや全体の調和によるリズムの動きや良さに気付かせる。	学習活動の観察 演奏発表 鑑賞評価 自己評価
まとめ	7 まとめ ◆全体で本時の視奏曲を演奏する。	◇クラス全体でのリズムアンサンブルの響きを味わわせる。	マスタードリル提出

7 仮説の検証

研究仮説を、音楽活動の基礎的な能力の向上を目的に「読譜マスタードリル」を活用することは、生徒の視唱力・視奏力が伸びるであろうとし、研究を進めてきた。ここでは、検証授業を行ったリズムに焦点を絞り、その学習を通して、生徒がどのように変容していったかを、事前・事後の読譜能力チェック、実態調査 (アンケート)、視奏テスト、生徒の自己評価を基に検証した。

(1) 音楽活動の基礎的な能力の向上

① 読譜能力チェックからの検証

検証前後に行った読譜能力チェック正答率の比較を、図9に示す。事前の75.2%から18.8%伸びた「リズム判別」の結果をみると、ほぼ全員が音を聞いて正しいリズム楽譜を認識できる能力がついたと推察される。一方で、聞いた音をすぐに楽譜に書く「リズム聴音」は、見えない音の楽譜化という点で生徒にとって難易度が高く、顕著な伸びはみられなかった。

しかし、「リズム書込み」では正答率が29.1%伸び、曲の歌詞に応じた音の長さが分かり、正しく音符化できるようになったと推察される。

読譜能力チェックの解答時において、生徒の多くが聞き取った音を小声で口ずさんだり、鉛筆等で打ち鳴らす等、ほぼ正確にそのリズムは記憶していた。このように、読譜マスタードリルを活用しての学習は、正確なリズム判別や音符化できるようになった視点から、音楽活動の基礎的な能力である視奏力を伸長させるために有効であったと考える。

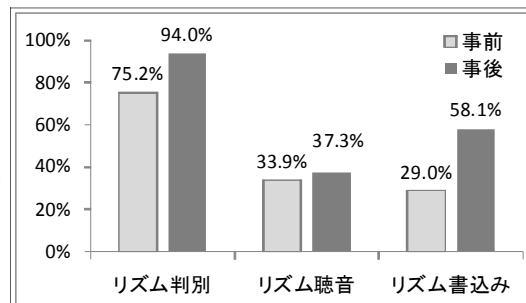


図9 読譜能力チェック正答率の比較

② 各群別による伸び率の比較

学習の前後における読譜能力が、どの群に効果的に働いたかを見るために、生徒を三つの階層に分け、伸び率を比較した（表3）。

「リズム判別」は、上位群と中位群に対しては、設問が簡単だったため問題の見直しが必要である。一方、伸び率73.2の下位群に対しては、正答率の推移をみても学習の効果は有効であったと言える。

「リズム書込み」は、高い伸び率がみられた上位群に対して、学習効果は有効であった。しかし、習得状況が十分でない中位群、下位群に対しては、細かな学習の手だてや補助問題の設定などが必要である。

これらのことから、読譜マスタードリルを活用したリズム学習は、下位群におけるリズム判別能力、上位群におけるリズム書込み能力の向上という点で有効であったと考える。

③ 実態調査（事後アンケート）からの検証

本ドリルの学習を終えて「楽譜を読んで、演奏できるようになったか」（図10）の質問で、「できる意識」が全体の約9割を占め、事前と比べ「よくできる」21.0%増、「まあまあできる」22.9%増となった。

これは、読譜を苦手としていた多くの生徒が「分かり」「できる」ようになり、本ドリルのリズム学習が、音楽活動の基礎的な能力を伸ばさせる手段として有効であったと推察される。

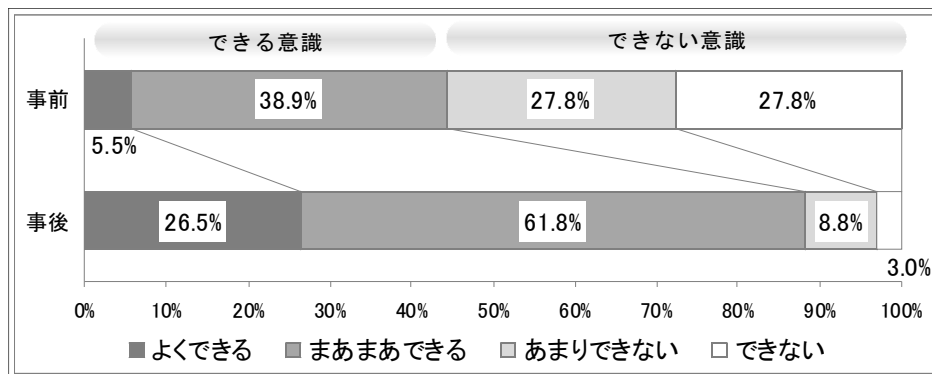


図10 事後アンケート（読譜と演奏）の結果

(2) 視唱力・視奏力の伸長

① 視奏テストからの検証

リズムアンサンブルの視奏テスト（図11）を演奏発表の形式で実施した。生徒が10分間という限られた時間での譜読、演奏練習、グループ発表した実態を検証する。

「エコーのいたずら」（2声のリズムアンサンブル）は、リズム模倣の要素を含んだ曲である。曲の最後には、上下パートにシンコペーションのリズムが分散され、互いを聞きあって演奏する能力が求められる。

リズムが苦手な生徒にとって、自分と違うリズムを聞きながら自

分のパートを演奏することは容易ではない。しかし、本ドリルで学習した「楽譜をよむコツ」（数える方法、リズム唱、2拍リズムパターン練習）が定着している場合、楽譜にリズム読みを書き込んだり、2拍パターンをチェックして演奏しており、聞いて覚えるだけでなく、楽譜を読んで演奏しようとする視唱力・視奏力の伸長が見られた。

また、4声のリズムアンサンブル視奏テストにおいては、自分のパートだけでなく、4つのパート全体を見ながら演奏できるようになり、一度に楽譜を読み取れる範囲が広がっている。

以上のことから、視奏テストにおける検証は有効であったと考えられる。

表3 各群別による有効度指数（伸び率）

	事前		事後		伸び率
	平均点	正答率	平均点	正答率	
リズム判別（全体）	2.3	75.2	2.8	94.0	75.8
上位群（13名）	3.0	100.0	3.0	100.0	
中位群（13名）	2.8	92.3	3.0	100.0	100.0
下位群（13名）	1.0	33.3	2.5	82.1	73.2
リズム書込み（全体）	10.7	29.0	21.5	58.1	41.0
上位群（13名）	20.6	55.6	34.5	93.3	84.9
中位群（13名）	10.5	28.5	22.9	62.0	46.9
下位群（13名）	1.1	3.0	7.0	18.9	16.4

注1 有効度指数とは、実践の効果を数量的に測り、事前・事後テストの結果から「伸び」の割合を数値で示したものである。
 2 読譜能力チェックは(事前)11月14日、(事後)1月30日に実施。
 3 有効度指数を求めるための公式は次の通りである。

$$\text{有効度指数} = \frac{(\text{事後の正答率}) - (\text{事前の正答率})}{100 - (\text{事前の正答率})} \times 100$$



図11 視奏テスト曲（生徒の書き込み有）

② 生徒の自己評価からの検証

次に示したリズムパターン（図12）は、生徒の自己評価からリズムパターンを簡単なものと難しいものにまとめたものである。読譜マスタードリルを学習した過程において、生徒は漠然と「リズムが分からない」とした段階から、自分が「できる」簡単なリズムパターンと「できない」難しいリズムパターンに区別して自己評価できるようになった。

このことは、楽譜を読む能力が伸びた生徒の変容であり、視唱力・視奏力の伸長として捉えられる。また、図12のリズムパターンを分析すると次のことが言える。

生徒は、2分音符・4分音符（休符）・8分音符の組み合わせは容易なリズムパターンであるが、付点4分音符・8分休符が組み合わさるとリズムや休符の感じ方が一定でなくなり、リズム理解のつまづきとなる。さらに、休符を含むシンコペーションやタイで繋がるリズムも苦手としており、次段階として複雑なリズム理解はもちろん、拍感や休符感の定着が更なる視唱力・視奏力を伸ばすために必要である。

以上の検証結果から、仮説は有効であったと考える。

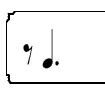
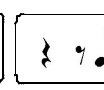
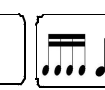
よくできる					
	97%	97%	95%	95%	87%
少しできる					
	68%	58%	55%	50%	50%
できない					
	42%	39%	21%		
リズムパターン下の数値は「できる」と答えた生徒の割合。					

図12 生徒の自己評価によるリズムパターン

IV まとめと今後の課題

「視唱力・視奏力を伸ばす読譜指導の工夫」をテーマに、研究を進めてきた。そのなかで得ることができた成果と課題を以下にまとめる。

1 成果

- ・段階的な学習内容でドリルを構成することで、「分かる」「できる」「楽しい」授業が展開できた。
- ・「楽譜を読むコツ」を定着させることができ、2拍のリズムパターンを習得した生徒は楽譜を読むことがスムーズになった。
- ・検証後の生徒の自己評価平均点は71.5と高い数値を示し、検証前、読譜に苦手意識を持っていた生徒から「リズムがよく叩けるようになったし、少しずつ楽譜が読めるようになった。」「みんなでアンサンブル演奏したり、リズムを読めるのが楽しかった。」「楽譜を読むのが楽になった。」という声が出てきた。これらの自信や意欲向上を「階名編」の学習へ繋げていきたい。

このようなことから、視唱力・視奏力を伸ばすために研究した理論と授業実践において、視奏曲を含んだドリルの作成と指導の工夫は、生徒の意識や能力の向上に結びついたと考える。また、今回のプリントドリルでの学習は、練習中心になりがちな毎時間の授業を記録し、フィードバックできる観点からも有効であり、音楽活動の基礎的な能力を高め、発展的な音楽活動に十分に作用すると考える。

2 今後の課題

- ・基礎的能力の異なる各群別の視唱力・視奏力を伸ばすためには、学習内容やシートの追加が必要であり、習得させたい難易別リズムパターンも加えたドリルの改訂を行う。
- ・今回実施できなかった「階名編」「和音編」などのマスタードリルは、学校現場での授業実践を通して研究を継続し、生徒の音楽活動の基礎的な能力を向上させるよう努めたい。
- ・生徒からの声「楽譜は読めるようになったけど、演奏するのは難しかった。」「休符があるところが難しい。」を真摯に受け止め、更なる学習内容の改善と指導の工夫を探究する。

これらの課題を受け、やさしく、早く楽譜全体の構成を正確に捉える方法、手段を身につけさせる授業実践ができるよう、研究を継続していきたい。

〈主な参考文献〉

- 中等科音楽教育研究会編 2006 『改訂新版 中等科音楽教育法』 音楽之友社
 川邊昭子 2005 『学力の資質向上をめざす音楽科授業の創造』 明治図書
 熊本県高等学校教育研究会音楽部会編 2001 『21世紀からの高校音楽授業』 明治出版